

釣れ釣れなるままに

1995年思い出の釣行記 PART. 6

入会4年目にして 初の総合優勝



岩見沢釣遊会

鹿島釣狂

この釣行記は月刊「北海道の釣り」に掲載される。その後、「北海道の釣り」に投稿が続くことになった。

1995年岩見沢釣遊会第7回大会

☆開催日	平成7年11月19日
☆開催場所	賀張川～三石漁港
☆入釣場所	新冠川河口右岸
☆潮（浦河）	満潮 00時43分 103cm 干潮 06時02分 68cm
☆天候	晴れ 風弱く 波1～2m 後べた風
☆釣果	カンカイ 459 mm 1 カジカ 430 mm 11 重量 555 0g
☆成績	1444 点 重量優勝 団体戦優勝：Fチーム（吉井、広田、吉川、波辺、仲俣）

10月15日 昇任論文試験

11月16日 昇任面接試験

11月17日 公開研究会 研究紀要の作成には毎日夜を徹しての作業に追われた。研究発表は緊張したが上手くできたと思う。

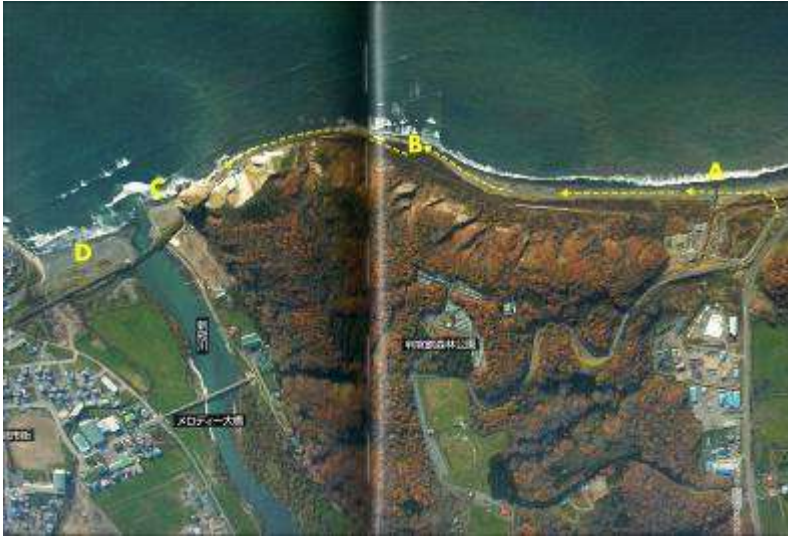
先輩の教え

2か月ぶりの例会参加である。仕事の都合上満度に例会に参加できない悔しさを今回の例会で晴らそうと意気込んで悔んだ。しかし、貧乏暇無しは相変わらずで、出発当日も午前勤務が終わってからのエサの買い出しで、イカゴロ、ソーダー鯉、鮪ミンチを溶しながら、合間を縫っての仕掛けづくりである。いつものことながら釣り場に関する知識はまったく無く、バスに乗り込んでからの情報集めとなる。さいわい私の所属する釣遊会は親切な仲間が多く、快く情報を提供してくれる。

私は釣遊会に入会して4年目になる（実は、海釣りは例会だけの参加）が例会の度に、釣りの初歩からエサのこと、仕掛けのこと、釣り場のことなどを親切に教えていただいている。酒がまわり陽気になってくるころ皆さんの口は滑らかになってくる。今回も佐々木秀美さんのお世話になる。彼は、本会の第1回から第5回までですでに年間優勝（8点①③①②②～年間7回の大会のうち5回の総順位点）を決めていて、今回は余裕のある釣りのはずである。昨年度彼が入った新冠川右岸の様子を地図入りで紹介してもらおう。ポイント4カ所を懇切丁寧に教えてくださった。実は、第2回大会（東歌別）でも彼のいわれた通り実践したところ、1426点という高得点で2位に入賞することができたのだ。

カンカイに化けたアカハラ

バスは賀張川、厚別川、大狩部、節婦、判官館前とたくさんの仲間を降ろし、新冠川の橋を越えたところで私一人を降ろした。聞いていた道とはかなり違うようだが鉄橋目指して進む。鉄橋は歩きやすくなっているのだが、先が見えないのと高いのに加えて荷物の重みもあり、少々不安な足取りで進む。20分ほどでトンネルが見えてきた。その手前がまず最初のポイント（C）である。ここは新冠川右岸に短く突き出た防潮堤とトンネル前に張り出した岩場に囲まれて湾渦状を形成している。



右斜め前から寄せる波が高い。その中にゴロの天秤にコマセがたっぷり入ったネット仕掛けをドボンと投げ入れる。30号のおもりが軽いのかすぐに岸に打ち寄せられる。竿3本を何度も続けて打ち返すが当たりはまったくくない。アカハラはなんばなんでも釣れていいは

ずなのだが・・・。

「3時まで粘って駄目だったら第2のポイントに移動するように。」と言われていたので、どうしようかと悩んでいるところにやっと待望のアタリがきた。がくんと竿尻が持ち上がり大物を予感させたが上がってきたのは30cmを少し越える程度のカジカである。その後カジカがバタバタと釣れたがアカハラがこない。アカハラはいないのか？

竿1本をそのままにし、2本に大きめのカツオをつけて遠投に切り替える。4時10分、遠投にしていた竿にクンクンという当たりがある。竿を手に持ちグッ、グツーときたところで合わせもバッチリ決まる。私は、アタリがあると必ずといっていいほど次のアタリに備えて竿を持つようにしている。その途中で隣の竿に当たりがあった時などは、どちらの竿を持ったらよいのか右往左往してしまう。さらに、3本となるともうパニック状態でどれも空振りに終わることもある。「3兎を追うもの1兎も得ず。」という格言があったかどうかは知らないが、そのほうが多いのも事実である。しかし、この時ばかりは、アブラコの3段引きで3段目の合わせが決まった時とまったく同じである。しめしめ、頭を横に振る感触が伝わってくる。グッ、グツーと深み目指してつき刺さる感触もいい。意に反して波打ち際に上がってきたのは、少し赤みを帯びたカンカイである。手にとってみると白い腹に虹色が差し、とても美しい。40cmのズックバックに合わせると尾鰭の部分がはみ出している。45cmはありそうだ。これだけあれば魚種に文句はない。アブラコであろうと

アカハラであろうとカンカイであろうと。これで、2異魚種5匹はそろった。後は大きいものと入れ替えていくだけである。

大犬がカジカに

辺りが、うす明るくなってきた頃、近くでウォン、ウォンという鳴き声をする。形ははっきりしないが大きな犬のようである。離れているのだから、危険はないと思うのだが気味が悪い。石でも投げて追っ払おうと思うのだが反対に襲ってきたらどうしよう。どうも犬は苦手である。しばらく、キャップライトの光をあび金色に光る2点と、私の恐怖に怯えたくもった2点が睨み合う。私の口元から出る言葉は「シッ、シッ」と力弱く呻いているだけであるが、万一に備え、手には大きめの石が2つがっちり握られている。犬のほうはというと、私が余りにも惨めに見えたのか大きなしっぽを揺らして悠々と去っていった。

5時10分、ガッガッガツと竿が大きく揺れ、ガクンと竿尻が持ち上がる。カジカだ！口を大きく一杯に広げ、えらを張って上がってきたのは、イカゴロをがっぷりくわえた43cmほどのカジカである。

その後40cm弱のカジカを加えて6時に移動する。佐々木さんとの約束通り後3つのポイントを進めなければならない。これらのポイントはどれも遠投だけなので、コマセやイカゴロは全て使いきった。あがり10時だから1ポイント1時間ごとの見当である。トンネルの入り口に「列車が通る時刻を確認してから通り抜けて下さい。」とある。列車の通る時刻など分かるわけではない。朝1番の列車が来なければよいがと思いながら駆け足で通り抜ける。コマセやゴロを使い切ったはずなのにかなりよたよたした足取りである。

悲喜こもごも

「トンネルを抜けて100mほどのところに波が盛り上がってくるところがあるからそこに遠投をかけなさい。」との言葉通り、場所を探す、余りにもべた凧なので良く分からない。誰かが釣っていたと思われる足跡がたくさん付いたところに荷物を置き、さらに前進して、判官館前(B)に入った前上会長、渡辺副会長、大前事務局長、島、岡さん達の様子を窺いに行く。皆さん、口では駄目だと言いながらまんざらでもない様子である。

荷物を置いたところに戻り、竿2本を遠投にして再度挑戦である。遠投と言ってもそのポイントに届いているものなのか、私の投げる距離がはたして遠投と言えるものなのかどいかが全くわからず、闇雲に投げているだけである。それでも、カジカの35cmぐらいのものを追加する。

第3のポイントに移動する。護岸が切れたところから1時方向にこれも遠投である。なんとなくプール状になっているのでここは分かりやすい。大遠投と指示があったところを見ると私が投げている距離もまんざらではないのかもしれない。しかし、ここではハゴトコがコツコツと竿を揺らすだけで大きな当たりはない。次に目指すべき第4のポイントで

は、会長さんたちが盛んに竿を振っているのですが、ここで締切り時間まで粘ることにしたが、上って来たのは小さなハゴトコ3匹だけであった。

帰りの距離もかなりあるので9時20分に後片付けを始める。私はいつも時間ぎりぎりまで粘ることを信条としているが、今日はもういいだろう。帰りは霊園前のバス停に向かって戻ることになる。来たときとは違って沢山の仲間がいて本日の釣りについて話が弾む。釣遊会の大きな黄色い旗を前面に、少し遅れがちにバスがやってきた。いつもは、釣り果の差によって悲喜こもごもだが、今日は皆良い釣りをしたようである。

第2回大会のことが頭をよぎる。この時は1426点の釣りをしたのに西川さんがそれを上回る1517点を出した。会の規約（身長と重量優勝は重複しない）で身長優勝はしたものの、総合で2位に甘んじている。「今日もまた」と思い、他の会員の様子が気になるのは私ばかりではないだろう。



念願の初優勝

泉食堂前で審査があった。次々と大物が出てくる。嵐さんはやはり凄い。私より一回りも二回りも大きいカジカを出す。嫁さんのアカハラも大きい。矢根さんの白っぽいクロガシラもいい。45番の私の審査はいつも一番最後である。結果は、45.9cmのカンカイが効いて1444点という高得点で優勝することができた。初の重量優勝である。照れくさいながらも晴れ晴れとした気持ちで大きなトロフィーを前上会長からいただいた。いつもは拍手する側だった私に寄せられる皆さんの拍手も心地好い。

帰りのバスでは心地好い疲れでぐっすり眠る。意気揚々と凱旋する父を尊敬のまなざしで見詰める息子や娘、そして妻の姿を夢見ながら・・・。



年間成績

② 5 / 28 東歌別 1426 2位

③ 6 / 16 幌内府トンネル 660 16位

④ 7 / 16 庶野漁港 460 22位

⑤ 9 / 17 春立 716 11位

⑦ 11 / 19 新冠川河口 1444 1位

累計点 5回 52

5回平均 $4706 \div 5 = 941$